

【入選（中央審査）】「水の作文大賞」

水が私に考えさせてくれたこと

熊本県 御船町立御船中学校 三年 寺田 俊太郎

みなさん想像してみてください。みなさんの手にはコップがあります。そのコップに蛇口をひねって水を入れるとき、みなさんはどんな音を想像しますか？

私は「ジャー。」だと思います。そこで、家族にも同じことを聞いてみました。すると、弟は「ぼちゃん」、祖父は「ドバーツ」母は「シャーツ」父は「じよろろろ」と、みんな全く違うオノマトペが返ってきました。たつた一つの水の音に対して、たくさんのおノマトペがありました。

そこで私は、ふと「日本みたいに、英語の水に関するオノマトペはどのようなものがあるのだろうか。」と思いました。調べると、弟の「ぼちゃん」と同じ意味の英語のオノマトペは「plop」と表現するというのがわかりました。さらに、「ぼとん」「ぼとつ」「ぼとっ」のような水の落ちる音は、すべてこの「plop」で表現されていました。他の言葉でも、英語のオノマトペは似たような日本語のオノマトペをまとめて表現していることがわかりました。比較してみると英語の水に関するオノマトペより、日本語の水に関するオノマトペの種類の方がとても多いのです。

なぜ、日本語の水に関するオノマトペが多いのかを考えてみました。それは日本が身近に水が感じられる環境になっているからだと思います。

日本は海に囲まれている島国です。だから海が日本人の暮らしに密接に関わっています。川や滝が至るところにあり、そこから必ず海につながります。海や川には、魚やカニなど水辺で暮らす生物がたくさんいます。私たちは、水辺で獲れたものを食べたり、川で遊んだり、滝を見に行つて涼をとったりなど生活の中に水が深く関わっています。漢字にも、沼、泳、流、漁など水に関する「さんずい」の漢字がたくさんあるのも、水が近くに感じられたからでしょう。

さらに、日本には四季があり、六月になると梅雨の時期を迎えます。そこ

で私たちは、いろんな雨の表情を見ることが出来ます。例えば、地面からの跳ね返りで足元がぬれるような強い大粒の「ザーザー」と降る雨、大粒けど少量ずつ「ぱらぱら」と降る雨、静かに霧雨のような状態で「しとしと」降る雨。他にもたくさん雨の様子を表現できるはずですが、そこには日本語の情感や繊細さを感じます。

そして、日本人の主食は米です。米を作るためには田んぼに水を張らなければいけません。水を張るためには、山から引いてきた豊富な栄養分をふくんだ水を農業用水として利用しなければいけません。昔から人々の食生活と水は深く関わっています。私の住む熊本県も至る所に田んぼがあり、用水路の水の音が聞こえてきたり、水に群がる蛍を眺めたりすることが出来ます。私は、この水を感じられる環境がこの国からなくならないようにしたいです。

熊本県は水量の減少や湧水地の枯渇が問題となっています。またほかの県に比べて水の利用率が高いこともその問題に拍車をかけています。

このままでは阿蘇外輪から熊本市まで、約二十年の歳月をかけて磨かれた「蛇口をひねればミネラルウォーター」と言われるほどの地下水がいつか飲めなくなってしまうかもしれません。その問題を解決するために、私は自分の身の回りの事から取り組みたいと思っています。まずは、「水は有限である」ということを自覚する事が大切だと思います。そして、有限な資源を大切に使うために節水を心がけ、実際に実践したいと思います。

けれど、私一人が節水を実践しても私の願いは叶いません。だからこそ私達は水の大切さについて考え、限りある水資源がなくならないように行動を起こしていくべきなのです。